

わたしの戦争体験

粕屋郡古賀町

齋藤 達子

毎日のように出征軍人を見送った後の農村は人手不足になって、子供達も食糧増産を手伝うことになった。私はその頃、村の国民学校に勤めていた。上級生の日課はいつとはなしに晴耕雨読になっていた。猫の手も借りたい程忙しい農繁期になると、出征軍人の留守宅に奉仕作業に行った。

現代の農作業は機械化されて楽だが、その頃は機械と言えど稲こぎぐらいで、それも人間が足で踏まなければ動かない。耕す事と運搬は牛馬の力を借りたが、その他は皆手仕事であった。苗代の苗取り、苗運び、田植え、稲刈り、冬の麦踏み、麦秋の手伝い、生徒にできる仕事は何でも手伝った。

私も受持ちの生徒（5年女）のうち、非農家の者8人程を連れて奉仕に行った。

「初めての者ばかりで、お役にも立ちませんが」と挨拶すると、「いや、いや、大勢来ちもろうち助かります。ところで戦地から便りがありますな」と、私の夫の事まで気遣って下さって恐縮した。当日の仕事は苗取りと聞いて、一瞬不安が頭の中をかすめた。生徒も始めてであろうし、私も実家・婚家共に非農家で、水田に入ったこともない。『しかしこれも銃後の務めだ。やれるだけやらねばならない』と不安を振り払った。

案内された苗代には、知らないおばさんが一人働いておられた。挨拶がすむと生徒をおばさんの回りに集めて暫く見学させた。おばさんは指先に力を入れて土のまぎわを引っばる。上の方を持つと、苗が切れたり折れたりして役に立たない。抜いた苗の根についた土をよく洗い落とす。東は同じ大きさにする、などくわしく教えて下さった。苗取りを始めると土は思ったより軟かだったが、根がからみ合って相当力のいる仕事だった。生徒達は「これ誰がしたと？。よう洗わんとまだ泥が残っちゃうよ」など注意し合って、熱心に働いた。おばさんは隣の苗代の人達と話しながら、両手をそれぞれ動かして苗を取る程の腕前、私の2倍も3倍も能率が上がる。そよ風は吹くが6月の日差しは背中に暑い。こわれた木箱のような物に腰掛けて、体をくの字に曲げての仕事は楽ではない。指先も痛くなった。まだ正午には間があるのにおじいさんが来て、「先生、もう止めちかっせえ」と言われた時は内心ほっとした。

奉仕作業の合間には荒れた山畑を開墾し（男生徒）、そばの種を蒔き、芋づるをさした（女生徒）。運動場の半分は畑になり、花壇も菜園に替わった。高等科の実習田も多くなった。食料品も衣料品も学用品も不足したが、『欲しがりません、勝つまでは』とがまんした。しかし肥料の不足はがまんできない。それを補うために堆肥作りに励んだ。上級生は道に落ちている牛や馬のふんや、縄切れ等を拾いに出た。高等科の生徒達は非農家や炭坑住宅などの下肥汲みにまで行った。家庭で不用になった俵、むしろ、野菜屑、落葉、草、およそ堆肥になりそうな物は何でも持ち寄った。運動場には大きな堆肥の山が幾つもできて、見る人毎に、「これはまあ大した物だ。『塵も積もれば山となる』とはこの事ですな」とほめて下さった。

戦況が厳しくなると空襲が始まり、燈火管制もまた厳しくなった。北九州付近の上空では、昼となく夜となく凄惨な攻防戦が繰り返された。ある時は戦列から離れた1機が火だるまになって遠賀川の川原に墜落、爆発して夜空を真赤に彩りながら炎々と燃え続けた。もはや銃後ではなく戦場になったと思った。校庭には2ヶ所に防空壕が作られ、警戒警報のサイレンが鳴ると避難させた。校外作業の場合は近くの人家の軒下、山の中、神社寺院の森などに避難させた。『もし身を隠す物がない時は地面にうつ伏せになって動くな。動けば射撃される。真白や赤など目立つ色も目標になるので身につけるな』などの注意も繰り返した。

麦秋の頃、麦打ちをする事になった。生徒達の机、腰掛を黒板の前に積み重ね、一方の壁に向って机を4脚並べると作業場になった。廊下には高等科の実習田から運び込まれた麦束が山のように積み上げられていた。大きな麦束の縄を解くと小束に分かれる。小束の穂先を机にびしりと打ちつけると、ばらばらと実が飛び出す。麦わらは南の窓から外へ投げ出す。六年生ともなれば私より仕事上手な者がいて、先頭に立って働く。馴れない者もそれを見習ってがんばる。打ち手は入れ替わり立ち替わりして作業は順調に進んだ。廊下の山が大分低くなったと思った頃、突然警戒警報のサイレンが鳴った。

生徒達の目は一斉に私に集る。私は「行きなさい」と叫ぶ。生徒達は防空頭巾のひもを結びながら教室から飛び出す。私の組の生徒は、入学して間もない1年1組の生徒が、防空壕へ避難するのを手伝う役目があった。私は低学年用の便所へ走り、取り残された者はいないか調べる役目があった。「誰かおるね」と叫びながらドンドンと戸を叩いて回る。いないの確認すると、長い土間廊下を南へ走って運動場へ出るのだが、途中で早くも空襲警報が鳴った。出口までは行ったものの、畑の向うにある防空壕までは進めない。南の方には六ヶ岳がそびえて空は狭く、機影は見えないが、爆音は近いので山の向う側の町が攻撃されているらしい。彼等はそれから遠賀川沿いに北上するのがきまりのコースだったので、ここにいても大丈夫だと思った。ところが思いがけなく稜線すれすれに大きな機体がぬーッと現れて、ぐいぐい高度を下げながら私目がけて襲いかかって来るではないか。『やられる』と思った瞬間、全身の血が凍った。土間にへばりついた私の頭上を爆音が通り過ぎた。二度、三度。彼等は必ず3機編隊、5機編隊で波状攻撃をするのだった。解除のサイレンが鳴っても全身の力が抜けたようで暫くは立ち上がれなかった。やがて防空壕の方で生徒達のざわめきが始まって、だんだん近づくと教師としての自覚が私を立ち上がらせてくれた。私を取り囲んだ生徒達は、ほてった顔の汗を拭きながら、防空壕内の暑かった話ばかりをして強い衝撃を受けていない様子なので安心した。一休みして作業再開、遅れを取り返そうとがんばって予定の仕事を終わらせた。

午後の職員会で聞いた話では、学校付近の人家には機銃掃射の弾が降って、運動場と隣合せの家では屋根瓦と天井を突抜けて畳に突き刺さっていたそうだ。運動場の一部にも縄張りをして、立入禁止の札が立っていた。

もしも防空壕か私に落ちていたら大変だったと、職員生徒一同の無事を喜び合った。作業中の空襲に幾度も肝を冷やしたし、馴れない仕事に失敗もあった。病気もした。あれから半世紀、当時の村も人々も遠くなったが、思い出は今も鮮やかに蘇ってくる。